

心豊かな暮らし

縁_{en}

<http://www.yabashi.co.jp/house/>

2014 Vol.30 spring



南陽倶楽部 外観

季刊
縁 en 2014 Vol.30 spring

心豊かな暮らし

contents

特集

夫婦ふたりの「^{つい}終の棲家^{すみか}」—3

岐阜県岐阜市 K様邸

矢橋の注文住宅 —7

矢橋の分譲住宅

矢橋の家を見に行こう。—9

日本の伝統技術を明日へ

矢橋大理石株式会社—11

国産大理石の洋館

南陽倶楽部—13

連載 中山道赤坂つれづれの記 文／故 清水 春一

頼山陽と銘墨「程君房」

For the rich life of the mind

60TH ANNIVERSARY
悠楽
YUURAKU



YUURAKU MODEL HOUSE Living & Dining Room

■特集

夫婦ふたりの「ついでに終の棲家」

代々引き継いだ土地で、時代に合わせて住まいを変化させてきたKさん。
築五〇年以上の家をリフォームし暮らしていたが、子どもたちも巣立ち、
ふたりのライフスタイルに合わせた平屋に建替えた。
庭は、以前のままだ。

石畳は妻が石板を敷きつめ手入れをした。水鉢の下の陶器は、夫の自作と
夫婦ふたりで暮らしを楽しんでいる。

岐阜県岐阜市 K様邸



- 1 妻が手入れをしている庭
- 2 石材業を営む友人から頂いたという石の像や、息子の小学生時代の作品が庭に飾られている。愛着ある置物で庭を楽しむ
- 3 「和(なごみ)」シリーズの色調で落ち着いたキッチンとダイニング。矢橋オリジナル無垢フローリングは素肌に心地いい。ダイニングには煙や油を吸収するダイニング照明「クーキレイ」を使用

夫婦にとって必要な部屋のみで
事が足りる、平屋建て。
深みのある、落ち着いた色調の
「和」シリーズの家。



書画骨董に親しんだ父の古い茶道具、食器、絵画などを日常の暮らしに取り入れている。



子どもたちも巣立ったことだし、と建替えた家は、ふたりのライフスタイルに合わせた「終の棲家」。矢橋の家を見て、その品格に共感し、建替えを決意した。部屋は必要な数だけ、快適で静かな平屋建て。和「シリーズ」の深みある色調が気に入っているという。腰壁が、落ち着く雰囲気をつくり出している。

Kさんが引き継いでいるのは、土地だけではない。茶の湯を嗜んだ父の代には、「幽月庵」という茶室があった。Kさんは、父から引き継いだ古い道具や絵画などを日常的に親しんでいる。食卓には、古き良き食器が並ぶ。玄関やリビングでは、気に入っている画家の作品を季節に合わせて掛け替える。ここでは矢橋オリジナルピクチャーレールが活躍する。飾るだけではなく、書道をふたりで楽しむことも。妻は和琴も嗜む。

やはり岐阜に住みたいと、息子夫婦も愛知県から引越し、三年程前に同敷地内に家を建てた。孫もよく遊びに来ており、時には子世帯と共に食事も。孫と、一緒に季節の絵画を掛け替える様子は微笑ましい。適度な距離感で、笑顔の絶えない様子だ。



- 1 柔らかな灯りの透灯(とうとう)と、季節の絵画が玄関を彩る。オリジナル造作の棚上にはテーブルランナーとして着物の帯が使われている
- 2 冬の絵画を春の絵画に掛け替える。飾る作品が多いため、矢橋オリジナルピクチャーレールを多数設置している
- 3 父が大切にしていたという絵画を、四季の移ろいに合わせて掛け替える。体力仕事だが、部屋の雰囲気が変わり、気分がいい。岐阜にゆかりのある作家の作品が多い
- 4 父の代から大切に使用している食器で、妻の手づくり羊羹を味わう

多彩な趣味のふたり。
時にはひとりの時間を、時には孫と一緒に。

- 9 ダイニング横にある、腰壁と同じ高さの棚は矢橋オリジナルの造作。カウンター上にはテーブルランナーとして、着物の帯を使用している。ブロンズ像は加藤顯清作の「駿馬」。干支の像があり、それをその年ごとに飾っている
- 10 平屋の外観。右の建物が同一敷地内の息子世帯の家



- 5 庭で孫がのびのびと遊ぶ。つくばいにカエルを見つけた
- 6 建て替え前の門扉、アプローチはそのままに。門扉を開けるとご縁の「ゾウ」さんが。お庭の手入れは妻の担当
- 7 夫婦で楽しんでいる書道の作品
- 8 南向きでたっぷり光の入るリビングで、和琴を演奏する妻。結婚した時に用意したものを大切に使用



営業担当
住宅部
主任 豊田悦子

K様ご夫婦とのご縁は『ゾウ』が結び付けてくれたのだと思っています。悠楽のモデルハウスには何点か石材のオブジェが展示してありますが、その中の一つの『ゾウ』を見られ、『うちにもインドゾウの子ゾウがいるのよね』の一言がとても印象に残りました。後日、ご自宅に伺ってK様の庭先にある石材の『ゾウ』を拝見させて頂きました。その後、ご自宅のお話を伺ったり、ご趣味やお父様のお茶のお話等を伺い是非、矢橋の家で暮らしをもっと楽しんで頂けたら…と思った事を思い出します。K様ご夫婦からはたくさんの事を教えて頂きました。コーヒーのこと。器のこと。絵画のこと。ご料理のこと。などなど…本当にありがとうございました。私も会社の『招縁会』にてお茶のお稽古を始め2年が経とうとしております。いつかお二人にお点前を披露できたらと思っています。楽しみにお待ちしております。



心豊かな暮らし
For the rich life of the mind

矢橋の注文住宅



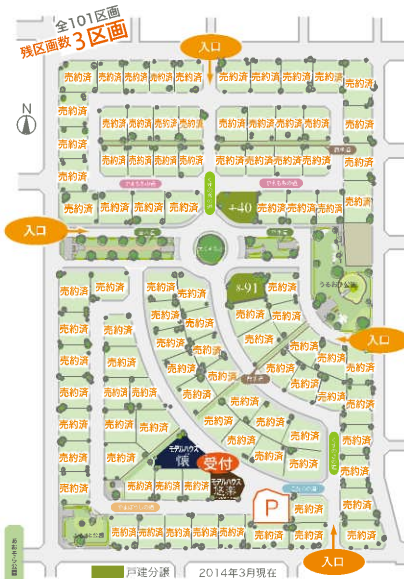
矢橋の家の理念

人が住むべき緑豊かな心休まる良い環境に、天然素材を活かした日本の伝統を受け継ぐ家に住もう。
日本の原風景を取り戻し、日本人が育つ住環境をつくりたい。

矢橋の家のこだわり

安全 安心 本物 快適 家事 収納 子育て 趣味

温故知新



NAVI: 岐阜県大垣市荒尾町1524-95



日本の伝統技術を明日へ

確かな技術 安心の家づくり

匠



矢橋大理石株式会社 YABASHI MARBLE CO., LTD.



矢橋大理石株式会社
代表取締役社長 矢橋修太郎

「感動を伝えたい」

石、木、土は昔から建築の3大素材です。いずれもみな我が地球からの贈り物であることは言うまでもありません。とりわけ「石」は、数千万年、数億年という永い眠りから醒めて我々人間の住まいや建物を飾るという点でまさに地球からの贈り物という表現がぴったりです。

日本における建築用の石材を加えるビジネスは、我が国の近代化により添う形で進展してきました。当社はその魁として二〇〇年余りに亘って商売を続け、著名な建築にも関わらせていただけてきました。しかし、そのスタート当初はまったくの手探り状態で、いつもお手本は「木」だったのです。我が国には素晴らしい木造建築の伝統がありますが、そうした技術的な蓄積があつてこそ日本の「石」の使い方が本場欧米にも増して洗練されて来れたのです。

そういう訳だから日本では、後輩である「石」と先輩の「木」との合性は意外にも大変いいのです。特に住宅においては、直かに触れやすい、目に近いということでの合性の良さを実感していただける機会が多いのです。当社は我々が地球からの贈り物によって受けた感動をいかに進化させ、お客様の感動にして差し上げられるかが商売の核心だと考えています。なぜならば、我々が受けた感動を我々だけに留めるのではなく、次なるお客様に伝えるということこそが、その感動の贈り主である我が地球に対する恩返しだと思うからです。更なる感動を新しいお客様に伝えるべく今後もたゆまず精進して行きます。



原石ヤードにギリシャ産の真っ白な原石が並ぶ



見本室では、各国の美しい色や模様の大理石や御影石などを見ることができる



金生山の大理石を使用した暖炉の前飾り

大理石：結晶質石灰岩 / 御影石(みかげいし)：火成岩の一種である花崗岩

東京駅や国会議事堂をはじめ、東京スカイツリーに至るまで数えきれないほどの工事経歴。明治時代から続くこの経歴は、信頼と確かな技術の証である。

一塊5〜6㎡、重さ20トン近くある原石を世界中から買い付ける。表面を見て中の模様などを見極めるため、経験がものをいう。原石を薄く切断し、砥石や水で表面を磨き上げる。一見きれいに磨き上げられた板でも、よく見ると傷が入っている場合がある。これを避け、色調や斑点を確認し、使用場所を決定する。これが「墨出し」といわれる技だ。実際に使用できる面は、半分ほどであり、この墨出しが出来栄えや収益を左右するため、非常に重要となる。墨出しにて使用場所が決まったら、墨通りに切断する。その後、機械では加工することのできない細かい部分などを手作業で丁寧に仕上げる。

注文に応じ、施工図に合わせて仕上げられた石材は、現場でピタリと収まる。大理石を柱や壁として丸ごと使用することからはじまった西欧と、薄く板状にして内装に使用してきた日本ではこだわりが違う。

先人の勇敢な行動と努力が今の私たちの暮らしへとつながっている。

金生山(岐阜県大垣市)では、石灰岩が採取されていたが、所々に大理石が混ざっていた。赤坂の宿場町では、その大理石で床の間の置物や掛け軸の風鎮などが作られ土産物として売られていた。しかしながら、南矢橋家の家主、初代亮吉は、そういった装飾品ではなく、建築石材としての取扱いを現実のものとした。明治期に入り西洋館の暖炉の前飾りを頼まれるようになったが、それらは国産大理石が手作業によつて作られていた。

大正期に入ると床面や壁面まで広く使われるようになり、大理石産業の新しい局面を迎えた。本場の大理石を使用した建築工事の依頼を受け、2代目亮吉は、大正十一年、一人でイタリアへと旅立つ。同年、イタリアのほか、ヨーロッパ、アメリカの各地を一年かけて訪れ、生産事情や加工技術を調べ、外国産大理石と機械設備を初めて日本へもたらした。当時に買い付けをしたイタリアの会社とは、現在も取引が続いている。



壁面等に石材を使用
矢橋林業㈱「悠楽」モデルハウス

矢橋大理石株式会社

代表者 矢橋修太郎
創 業 1901年(明治34年)1月1日
本 社 岐阜県大垣市赤坂町273
資本金 7,830万円
社員数 250名
工 場 敷地:131,000㎡ 建物: 40,000㎡

事業内容

[石材生産部]
・大理石、花崗岩その他建築用石材の加工、販売及び施工
・各種石材タイル、大理石モザイク、石材工芸品の製造販売
・石材使用建築物、建造物(造園、舗道、記念碑など)の設計・施工他

[鉄工生産部]
・鉄道車輛部品、バルブ部品の製造販売

[電子生産部]
・電子プリント基板の加工



本社



原石ヤード

矢橋亮吉(2代目)

1898年(明治31年)現岐阜県大垣市赤坂町にて大理石業を営む亮吉(初代)の次男として生まれる。11名次雄。
1922年(大正11年)イタリアに行き大理石を買い付ける。イタリアの他、ヨーロッパ、アメリカの各地を訪れ、最新技術や取引先を得て日本の大理石業界をリードする。
1992年(平成4年)逝去。

大正時代に建てられた格調高い大理石づくしの洋館。
現在は、矢橋大理石のゲストハウスとして利用されている。

現在では、ホテルやビル、マンションなどでも大理石はよく使用されているが、百年前の日本では、住宅に大理石を使用するのは珍しかった。
その時代に、このモダンな邸宅を建てたのは、初代矢橋亮吉である。
国産の大理石をふんだんに使用し、窓や扉には大正期に流行した、アメリカ系の濁りガラスを使用したステンドグラスが使われている。様々な模様をはじめ、オウムやシカ、フクロウなどが描かれている。
次男、次雄(2代目)亮吉が結婚した際、新居として建てられたといわれている。



外観
屋根に特徴があり、ドイツの影響を受けた建物。急傾斜にしたうえで折り曲げて屋根を強調するのは、ドイツのユーゲントシュティル様式の特徴である。外壁の一部に大理石が使用されている。



2Fサンルーム
半円窓に二つの方立てを立てた窓は、ローマの浴場に多く用いられていたことから「浴場窓」と呼ばれている。ステンドグラスの縁取りも美しい。



1Fサンルーム
床には貴重な国産の白大理石が敷き詰められている。引き戸の鏡板からも、大理石を通した美しい光が入る、外と中をつなぐ居心地のいい空間。



2Fサンルームへと繋がる階段
オウムのステンドグラスの扉は、かつて旧館と洋館をつないでいた。

国産大理石の洋館

南陽倶楽部

旧矢橋亮吉邸

竣工地:岐阜県大垣市赤坂町
竣工年:1924年
設計者:岡村徳一郎
構 造:木造2階建
一般非公開



1F客間
サンルームから客間へと入る扉が引き戸となっている。この時代の洋館では、ドアが多く用いられていたが、ここでは日本のふすまや障子と同じ形式であり、日本の伝統的な住まい方を取り入れている。鏡板は、金生山産の大理石を使用。

暖炉
マントルピース(暖炉の前飾)には、金生山産の「錦紋黄(きんもんきい)」という名の大理石を使用。現在この模様の石を産する場所はなく、幻の大理石といわれている。

古来より人は、安全かつ快適に暮らすために、自然の中から素材を選んできました。更に文化が成熟してくると、更に美しい素材を選んで、そこに更に美しく見せる加工を施して住まいに使用するようになりました。茶道の茶室など、数寄者(茶道の求道者)は自己の美意識を反映させ、茶室と広間で構成された数寄屋建築のスタイルを築き上げました。
近代の日本では伝統的な日本家屋に加え、明治以降近代西洋文明が流入し、日本ならではのきめ細かい、繊細な納まりの西洋建築が数寄屋の日本家屋と共に、財閥のオーナー、地方の素封家の邸宅として建てられました。
木と土と石が日本でも西洋でも主な素材でした。木の造作も、石の石目をあわせた微妙な曲線の加工、左官の漆喰塗りの技術など、日本的で繊細な、細部まで精度の高い工事を実現した建物が多く残っています。
現代のデザインはすっきりとした機械による加工を多用し、加工コスト低減を優先したデザインが主流となり、現在では多くの住宅建築において建材は買うもので、作るものではなく買ってしましました。しかし、歴史に残ってきた建築作品は人の手の技能による造作を施した作品が多いのです。
家は人が住んで毎日暮らしを営む場所です。機械のように全く正確ではないけれど人の手の暖かさが残る建材を少しでも多く使うことが、地場工務店の責務だと思っています。
「矢橋の家の次のコンセプトは木と土と石を使った近代西洋建築の復刻モデル「欧」に取り組みたいと思います。」

矢橋林業株式会社

代表取締役社長 矢橋龍宣

うみゆり連載集

中山道赤坂つれづれの記

頼山陽と銘墨「程君房」

故清水 春一

頼山陽は文化十年（八三）十月、初めて美濃を訪れたとき、真つ先に赤坂の矢橋邸を訪ねました。当主の矢橋赤水（辰二郎）が、かねて

兄の赤山（勝三郎）とともに、京都の儒学者で有名な江村北海に師事して漢文学を嗜み、既に京都でも風流文雅の人として知られていた

ので、山陽はその名を聞いていたと思われるます。赤山・赤水兄弟の母が、もと京都御所につとめていた宮廷の女官であり、父（長卿）が京都で医師を開業していたので、以前から交流があつたのかもしれませんが。

いずれにしても、そのとき山陽は三十四歳、赤水は六十六歳、赤水の長男拙存（名は庚、字は春星、通称辰次郎）は二十六歳で、父子揃って山陽の来訪を大いに歓待しました。矢橋邸の竹雪廬に数日の間滞在した山陽は、以来ますます深い交わりを続けます。このとき、江馬細香女史との巡り逢いの話や、金生山に登って麓にお勝山を望見して、徳川家康の関ヶ原合戦を偲び、中国古代周の文王の故事になぞ

らえて詠んだ七言絶句の詩のことは、既に紹介しました。今回はさらに、今一つのエピソードをご紹介します。

激しい無心の手紙

山陽は数日後、矢橋家を辞して岐阜に赴き、さらに北濃へと遊歴し、上有知の村瀬藤城や善応寺の善智和尚らと交わり、郡上八幡から引き返して大垣に江馬家を訪ね、十一月十二日に大垣を出発、尾張に行き、名古屋城下の宮町に小林香雪を訪ねて三十日余り滞在します。閏十二月二十日に再び大垣へ戻って来て、今度は久瀬川の菱田毅斎を訪ね、ここでまた暫く滞在します。このとき毅斎の弟子である後藤松陰が、師の紹介で山陽に入門し、のちの高弟の一人となるわけです。

山陽が菱田家に来たことを聞いた矢橋赤水は、わざわざ同家を訪れて、山陽に別れ

を告げるのですが、たまたま赤水が秘蔵の「程君房」の古墨を持参して山陽にみせたところ、山陽はびっくりして「このような立派な中国の古墨を矢橋さんが独り占めしているのは、いかにも惜しいから、ぜひとも私に譲ってほしい」と必死に所望しました。しかし赤水は「程君房」の銘墨をみせびらかした

だけで懷中にしまい込んでしまいます。非常に残念がつた山陽は十二月一日、出発に当たつて赤水に宛てた手紙を添えて、かねて赤水から依頼されていた山陽の父春水と叔父の杏平の揮毫のため絹紙を送り返します。手紙は「両叟の書を得んとせば、その代償に僕の欲しい墨を与えよ。貴君が持っている墨を僕に譲るのはやさしいが、僕が斡旋を頼まれた書の方が、よりバケ敷い。老兄が所持しているも古墨の値打ちは十三銭にも値しないよ」という厳しい調子のものでした。

あの有名な「船大垣を発して桑名に赴く」の詩をつくつたのも、このときでした。

山陽は翌年の正月、矢橋家に次のような手紙を書き送っています。

新禧万福申し収め候。御安和に御迎春を慶び奉り候。小生恙なく又犬馬の齢を添え候条、御放念下さるべく候。誠に昨年は罷り出て数日は御馳走、帰路は御老体遠路御要送、御厚誼忘るべからずと存じ奉り候。墨の儀につき、茶屋主人書牘遣わし申すべしと申すにつき、戯れに筆を走らせ候。畢竟淇澳の卒章に御座候。御鄙薄下されまじく候。（以下略）

正月三日 頼徳太郎

矢橋潜叟様辰次郎様

「あれは、戯れであつたから」と言い訳をしているあたり、誠に山陽の三面を窺えるよううで、微笑ましいではありませんか。



中国の古墨「程君房」



矢橋林業株式会社



環境に配慮した
用紙を使用しています。